

佳作賞受賞者

佳作賞

「その向こう」

「せる」100号

橘 雪子氏

橘 雪子（たちばな・ゆきこ）

一九七七年二月五日、京都生まれ。

一九九九年三月、京都府立大学文学部文学科卒業、老舗料亭にブライダルコーディネーターとして勤務。

妊娠を機に退職、英会話講師として独立。現在松原京極商店街にて「カフェギヤラリーときじく」を運営。コーラスグループ、ロックバンドに所属。

文芸評論家八橋一郎氏の小説教室、大阪文学学校を経て、現在「せる」同人。

「その向こう」

料亭で仲居をしている上田サチは、個室で接客をするとき自分の境遇を作って毎回違う話をしている。

板前の合田とは一年ほどの付き合いで、仕事帰りに焼鳥屋で呑んだり、マンションで抱き合って眠ったりするが、彼にも本当のことを言ったかどうか定かではない。

サチには両親がいないが、合田も早くに両親のいない人生を選んでいる。いまは料理長を信頼し工夫を凝らして料理をする、明日が楽しみな生活をしているのだと、サチに話す。

何をやっても現実感の薄いサチだが、いま現在の現実が嫌なわけではない。楽しいおしゃべりをしながらも働く男性のひかるさんは、袴を穿いて女言葉をしやべる。ほかの仲居との関係もよい。中でも女将はサチの作り話ぐせをおもしろがったり「時間がつながつている感じがしない」というサチに「それ、わかる」と言ったりする。

ある日サチは七夕の人形を捨てる仕事をひかるさんといっしょにするが、その行為が子供を捨てることを想起させて気が進まない。ひかるさんも何か察したのか、「こんなことしたくないでしょ。深く考えないことよ」と、ひとがたに何の意味もないと思ひ込むよう促す。サチはもう一度、

思いこむことで生きやすい現実を作るのだ、と自分に言い聞かせる。

その後相変わらず作り話に没頭するサチだったが、合田が「遠いところに行きたい」と言い出したことをきっかけに、少しだけ変わる。サチとともに行動することは、いままでつかんだことのない現実をつかみ、拡張していくことだと合田は言う。

遠出のあと、サチは料亭で作り話をしなくてもいい部屋の担当になる。サチは膝をついてふすまに手をかけ、「その向こう」を見つめる。

受賞誌

母娘餅 単行本

雑記囃子 20

せる 100

あるかいど 56

